図書館ニュース

◆「白鷗大学総合図書館Twitter」はじめました。

白鷗大学総合図書館のTwitterアカウントの運用を開始しました。
職員、学生スタッフ協働での運営です。図書館の情報を発信していきますので、Twitterアカウントをお持ちの方は是非フォローをお願いいたします。お持ちでない方は、下記URLで閲覧できますので、ご確認ください。
なお、Twitter上で質問をいただいてもお応えできませんのでご了承ください。

【白鷗大学総合図書館Twitter】
Twitterアカウント：@Hakuoh_Library
URL：https://twitter.com/hakuoh_library

◆「第１回学生選書」について

昨年度、総合図書館初の試みとなります、図書館学生スタッフによる「第１回学生選書」が行われました。学生目線で選ばれた図書が、大行寺分館の新着図書コーナー隣に展示してあります。貸出可能ですので、ぜひ読んでみてください。

ささやき

学生選書の展示は、図書館学生スタッフたちで、自ら考えアイデアを出し合いました。図書館ニュースで掲載した画像では分かりませんが、借りられた本が分かるようにと工夫したりして、またコーナーを華やかに飾っています。ユニークな蔵書が図書館に加わり、あなたの学習や研究、または私生活に役立つ１冊がきっと見つかるはずです。「第２回学生選書」もどうぞお楽しみに♪

	平成31年４月１日　発行
編　　集	図書館だより編集委員会
発　　行	白鷗大学総合図書館
〒323-8586	栃木県小山市駅東通り2-2-2
ホームページ	http://hakuoh.jp/library/index.html
印　　刷	第一印刷株式会社

図書館だより
HAKUOH
第53号 2019. 4
白　鷗　大　学

僕の本のコレクション趣味

名誉教授
川　瀬　善　美

僕には、物をコレクションする癖がある。と言っても、なんでもコレクションするわけではない。それは、社会福祉に関する本をコレクションする癖である。

何時頃からその癖は、始まったのか思い起こすと、大学院の学生時代から始まったように思う。理由は、経済的理由で思う存分読みたい本を買う事が出来ず、常に渇望していた事に由来する。

その結果、僕の手元には多くの本が集まった。僕の恩師である孝橋正一先生が世に出された本は、ほぼ全て僕のコレクションとなった。その為、孝橋先生がご存命中、僕にご自分の著書の貸し出しを依頼されたほどになった。

ところで、それらの全てを読破したかと問われると、否と答えざるを得ない。

そう言う意味で、コレクターであっても、読書家ではなかった。

僕は、今年の3月白鷗大学・白鷗大学女子短期大学部での25年間の教員生活を終える。

そこで、これから僕に残された時間を使って、今まで薫陶を受けた恩師の方々の著書、孝橋正一先生の『社会事業の基本問題』、一番ケ瀬康子先生の『現代社会福祉論』、高沢武司先生の『過渡期の社会福祉状況』、上田千秋先生の『ロバアト・オウエンとニュー・ハーモニイ』等の名著を読み直してみようと思っている。特に孝橋先生の『生き甲斐・死に甲斐』や、一番ケ瀬先生の『現代の老後考』はこれからの僕を導いてくれるものが多いと思っている。

家人から、これからは「断捨離」ですと、言われているので、今後はコレクターを卒業して読書家となる予定である。

図書館長になりたかった

名誉教授
針　生　　進

と、過去形で打ち明けたのも、本年３月を限りに退職となったわが身だからです。人生最大の楽しみのひとつが読書という私であれば、紙と印字、そして時には絵や図面からなる人類最高の発明品のひとつ、本と呼ばれるあの形態そのものにも魅了されてやみません。さらには図書館という（建築家であれば一度は設計したいと夢見る）建築物にも、壮大で神秘性をひそませる（ボルヘスやエーコなら悪夢に仕立てる）非日常空間にも心ひかれます。その一角に居場所をもてると思うだけでも心高まります。

と、ここまで読まれた方、誤解してはいませんか。白鷗大学総合図書館の館長になりたいなど一言もいっていないはずですが……。たとえ望んだとしても、そのような身のほど知らずの願いを、それもこのような公の場を借りて表明するほど厚顔無恥ではないつもりです。その役職・地位に求められる器量にも品格にも欠けるこの身についてはことわるまでもありません。校舎の増築・改築にともなう再三の移転。思わぬ水害による重要文献や施設の被害。そして規模も美しさも今までに優る新図書館の完成。このように波乱に満ちた白鷗大学図書館の来し方を振り返れば、その折々の館長、館員の方々のご苦労はさぞやとしのばれ、とうてい私などに勤まるわけもなかったと悟らざるをえません。

表題の時制を過去にしたのは読者を惑わせるため。今でもなれるものならと憧れているのは、では、どこの図書館の館長か。小学生のころから、わずかなお小遣いが許す限りで（当時では高くても100円ほどの）文庫本を買い求めてきました。内容にひかれるより、挿絵のあるものにまず手が伸びたのは、まだ幼いゆえの選択だけではなかった。安価で手のひらにのるほど小さな本のなかに収められた世界を、添えられた挿絵が豊かにも、広大にもしてくれるからこそ、集めてあきなかったのです。何度かの部屋の整理や転居のときにも別れられなかったとはいえ、今では書棚の奥や片隅に追いやられているものも多いそれらに再び日の目を当ててやりたい、と思うようになったこのごろなのです。昭和20年代に出版されたものなどは、所有者に似て外見はくたびれはて、商品価値もなきに等しいけれど、どれも私には貴重な蔵書。貸し出したりはせず、ガラスケースなどに入れて陳列したいものも少なくない。となると図書館というより「絵のある文庫本の部屋」とも名づけられる小さな図書室になるだろうか。収蔵予定書のなかから、内容、挿絵ともにお薦めの1冊目は、19世紀フランスの……と、ここで惜しくも紙幅がつきてしまいました。あとをお知りになりたい向きは当方までご連絡を。

他国を知るには

名誉教授
師　　啓　二

秀吉の朝鮮出兵（文禄・慶長の役、1592年～1597年）は韓国では壬辰倭乱・丁酉再乱と呼ばれる。私がお隣の国韓国に興味をもつきっかけは400年以上も前のこの大事件を題材とした『虎砲記』（宮本徳蔵著、新潮社1991年）という書物に出会ったことにある。この本は「王使」と本のタイトルである「虎砲記」の２編の短い小説からなっている。前者は秀吉の出兵前に日本へ遣わされた朝鮮通信使の副使金誠一（キムソンイル）の物語で、中島敦の『山月記』を思わせるような漢文調の文体である。後者は虎を一発で倒すほどの銃の名手（「虎砲」と呼ばれた）沙也加の物語である。

沙也加は加藤清正の軍に従軍したが、主君の窮地を救ったにもかかわらず理不尽な扱いを受けたため、部下を引き連れ朝鮮側に投降する（朝鮮側では「降倭」という）。彼が降倭となる決心をした理由は、朝鮮への出兵には大義がないと思っていたことのほか、そこで目にした書物が金属活字で印刷されていたことに大きな驚きと畏敬の念をもったことにあるという。

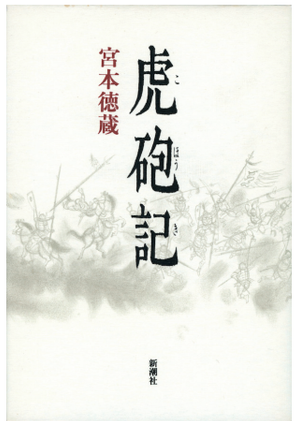
金属で活字を作る技術は13世紀の高麗時代にさかのぼるという説もあるが、訓民正音（ハングル）の創作で知られる世宗の頃（15世紀）には銅活字で盛んに出版がなされていたという。グーテンベルクが金属活字で聖書を印刷したことが聖書の普及に貢献し、ひいては宗教改革につながったように、印刷技術の発達がもたらす影響は計り知れない。

他国を知るにはその国の最高の文化に触れることが大切と常々考えている。韓国で言えば、高麗の青磁、朝鮮王朝時代の白磁、檀園や蕙園の風俗画など、度重なる戦火をくぐり抜けて残った文化財があり、いずれもこの国の文化の高さを示し、素晴らしい。お互いに相手の優れた文化を理解し尊重し合うという気持ちから、国と国との友好関係は始まるのではないかと思う。

金属活字

銅活字

※当時のものとは異なる



（執筆者五十音順に掲載）